

八千代市下高野の富士講資料

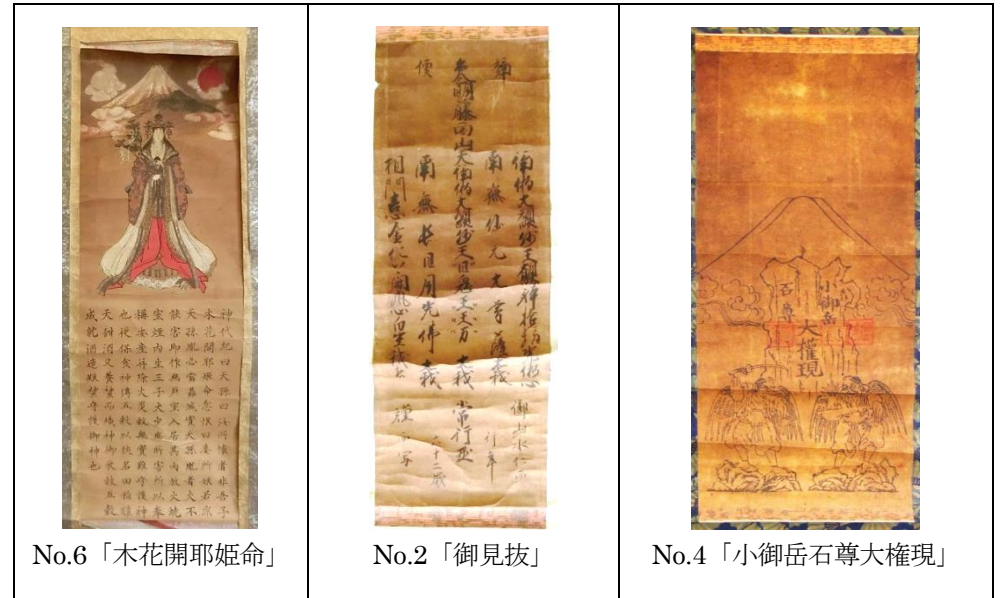
巖 由美

下高野福蔵院境内とその裏山にある嘉永2年（1849）から昭和3年（1928）の富士講の石造物4基と、下高野の立石正一（八郎右衛門）家旧蔵の富士講関連資料を調査した。

表 下高野立石家旧蔵・八千代市立郷土博物館収蔵の富士講資料一覧表

No	資料名	形態
1	掛軸「御身拔」（五行身拔）	紙本墨書軸装
2	掛軸「御身拔」（五行身拔）	紙本墨書軸装
3	掛軸「御身拔」（「烏帽子岩」の歌付き）	紙本墨書軸装
4	掛軸「小御岳石尊大権現」（大小天狗画像付）	紙本墨書軸装
5	掛軸「小御岳石尊大権現」（「砂山と・・・」の歌付）	紙本墨書軸装
6	掛軸「木花開耶姫命の図」	紙本採色画軸装
7	「不二行者世代巻」文書（弘化5年2月）	堅紙（2枚巻物状）
8	行名免状「真行真面」（明治33年6月15日）	堅紙
9	「崇判断」写し（大正12年2月3日）	折紙
10	御詠歌写し「追膳（善）御礼」他	堅紙
11	「富士講代々図」	版本
12	「浅間大神並扶桑教祖出現尊影」（明治19年7月）	版本
13	御札「角行導師之真像」3点	
14	御札「富士山祈禱御璽」3点	
15	護符「オフセギ」	小切紙
16	「人穴御垢」	小袋（砂入り）

図1 「御三幅」の構成




富士講の祭儀では3種の掛軸を特に「御三幅」と称し、富士信仰の御神語「参明藤開山」の唱えを記した「御身拔」を中央に、右に「小御岳石尊大権現」、左に「木花開耶姫命」の掛軸を並べて礼拝、また富士登山に携帯し山頂で掲げて拝んだという。

図2 「御見抜」


御見抜の文字と読み方

便	彌
參明 藤開山 天徳 大觀 妙 王 醍 鉢 拾 坊 光 術 心	南 無 仙 元 大 菩 薩 大 我
相 門 言 心 金 仁 開 風 心 白 生 我 者	南 無 長 日 月 光 仏 大 我


4 3 1 2 5
(唱える順序)



No.1 「御身抜」




No.3 「御身抜」

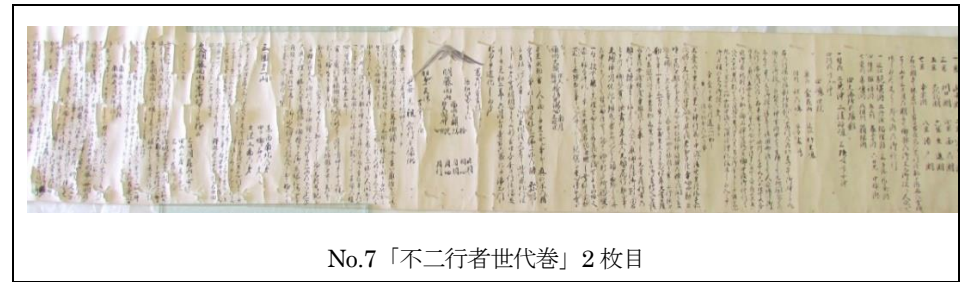


No.5 「小御岳石尊大権現」掛軸

図3 「不二者世代巻」文書



No.7 「不二者世代巻」1枚目



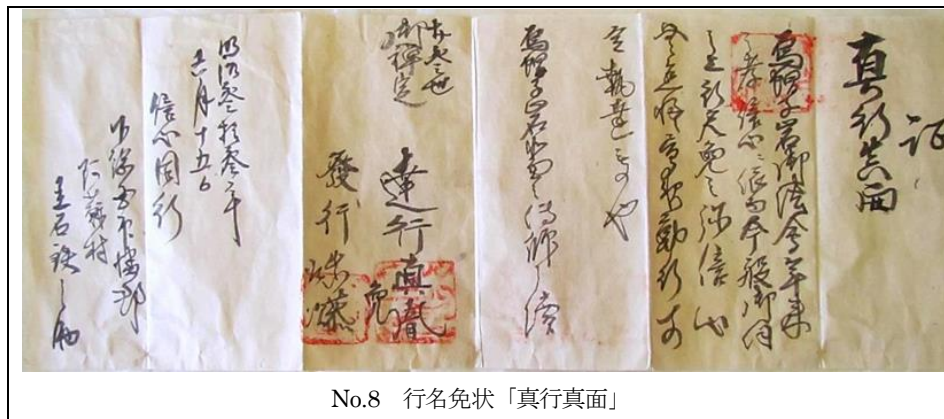
「弘化五*年（1848）戊申二月」に、「佐倉新町内肴町 水戸屋利兵衛」こと「山包講」の「先達」の「常行鏡月清口」より、「下高野邑八郎右衛門殿」あてに「免（ゆる）しの巻」として下された文書。（*は推定）



豎紙2枚に流麗な字体で書かれた長文で、富士山の神仏の格、聖徳太子の開山、「書行藤佛」（＝角行）の事績（内八湖外八湖四海四嶋での荒行、人穴での角材上の爪立行、「御身抜」の啓示）と、「七世食行身禄」の事績（御身抜に「參」の一字を加えて「參明藤開山」と改め、荒行の後、享保十五年入滅、後に「菩薩」となる）とその教え、この文書の取り扱い方が記されている。

山包講は、江戸の修山禅行（包市郎兵衛）が天明5年（1785年）頃におこした講で、禅行の弟子の市原市君塚の正行真鏡から、文政年間頃、安房をはじめ千葉県全域に広まったとみられる。

図4 免状



No.8 行名免状「真行真面」

No.8 (図4)は、明治33年、割菱講の第24世達行より立石鉄之助あてに発せられた行名「真行真面」の免状で、翻刻は「証／真行真面／烏帽子岩御法会年来／之孝信心ニ依而今般御伺／之上行名免之弥信心／無怠慢昼夜勤行可／令執達もの也／烏帽子岩北面の伝師之続／廿参世／御禅定／達行真胤／免／發行真恭／取次／明治参拾参年／六月十五日／信心同行／下総国印旛郡／阿蘇村／立石鉄之助」である。

立石真行（鉄之助）が手控えに写したとみられる資料が2点ある。

No.9 (図5左)は「崇判断」写しの折紙で、「崇判断」の内容として「一筋父母作罪／十七年神産後死霊*」ほか33項目を列記し、末尾に「大正拾貳年二月三日写ス／立石真行」と記されている。講の行者として、村民の心配事の相談にも乗っていたのであろう。(*は異体字)

No.10 (図5右)は、「追膳(善)御礼」、「ぶくぬき」(服喪明け)、「二親の御礼」 「虫封」の御詠歌の写しで、翻刻は下記の通りである。

「追膳(善)御礼／一 すみやかに花の都を立出て／弥陀の禅土ハ作る嬉しき／二 たいなるや法のはちすの花いかだ／をもふ湊ハつくぞ嬉しき／三 ふしの

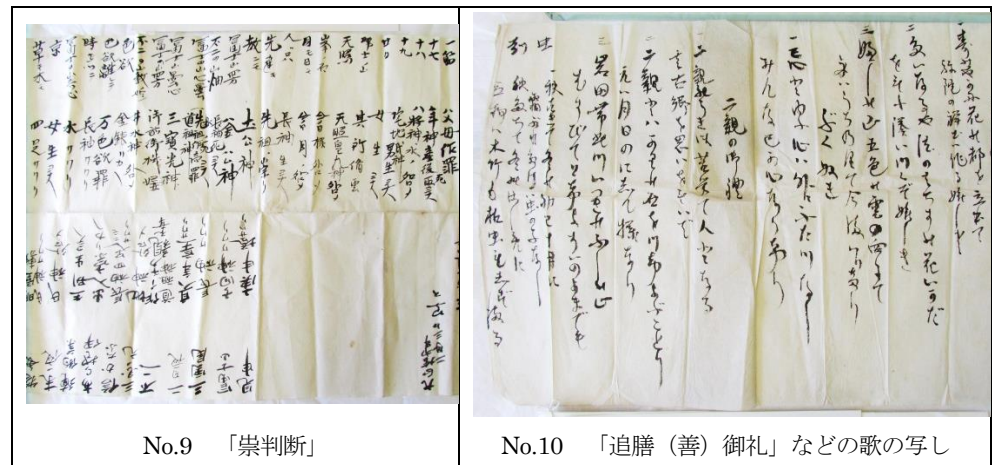
山五色の雲の向にて／身ハうちのりて今まいりけり

ぶくぬき／一 忌とゆふ心ハ外ニふたつなし／みんな己か心なりけり

二親の御礼／一 二親うれい苦勞て人となる／其古郷を思いをもハば／二 二親とハかりの名をつけよぶことり／元八月日ににしん様なり／三 岩田帯此ついつきのふしの山／むすびてとけよすいのよまでも

虫封／一 秋すきて冬の初わ十月に／霜がれたけハ虫の子なし／一 秋たちて冬のはしめに／立物ハ木竹も枯虫もしずまる」

図5 手控えの写し



No.9 「崇判断」

No.10 「追膳(善)御礼」などの歌の写し

版本(印刷本)とみられる資料が2点ある

No.11 (図6中上)「富士講代々図」は、高祖角行と二世日行・三世旺(がん)心・四世月旺・五世僧什(月行)、元祖身禄の尊像の絵で、天保3年(1833)の身禄百回忌に吉田の御師から印行された月行派の講祖代々の図(注6)と全く同じ絵である。

図6 版本・御札・護符など



No.12 「浅間大神並扶桑教祖出現尊影」

No.15 護符「オフセギ」

No.16 「人穴御垢」

No.12 (図6左)「浅間大神並扶桑教祖出現尊影」は、日月、富士山の図中央に「木花開耶姫命」神像、「明藤開山 藤原角行」、「人穴」と角材上爪立行中の角行尊像、中段に角行の事績、下段に「正統二世日旺師」から「六世光清師」まで

No.11 「富士講代々図」

No.13 御札「角行
尊師之真像」

と、「別立五世月行師」「別立六世身禄参明藤開山食行身禄尊師」の系図と事績が書かれている。

江戸後期に江戸八百八講といわれるほどに普及した富士講は、明治元年の廃仏毀釈、明治4年の政府による御師制度の廃止により、明治8年に富士山の仏教的地名が変更され、富士講は教派神道の教会組織に再編成される。北口浅間神社が中心になって組織されたのが、扶桑教会である。

本資料は、欄外に「明治十九年七月十八日出板御届」とあり、静岡県権訓導の許可を得て、扶桑教会より出版されたものである。

身禄は正直・慈悲・勤労など内面の信心を重視し、呪術を否定した教えを説いたが、町や村の先達は、御札の配布や、吉凶の占い、病氣治しなどの庶民の現世利益にこたえる役割も負っていた。

No.13 (図6左上)の御札「角行尊師之真像」と、No.14 (写真省略)の御札「富士山祈祷御璽」は、手刷りの御札で、それぞれ3点ずつ残っている。

No.15 (図6中下)の小切紙は「オフセギ」という呪術用護符で、「参」の小字が多数版刷りされ、病氣治しにはこれを切って飲むと効力があるとされた。

No.16 (図6左下)は「人穴御垢」小袋で、「開祖人穴御垢」と刷られた袋内には、角行が修行した洞中の砂が入っており、「オアカ」として信仰され、ご利益があった。

下高野の石造物・文書資料による富士講のあゆみ

- 弘化5年2月(1848) 「不二行者世代卷」山包講 立石八郎右衛門
- 嘉永2年2月(1849) 仙元宮石祠 立石籐右衛門・立石傳左エ門
- 文久2年2月(1861) 小御嶽石尊大権現塔 立石傳左エ門など
- 明治33年2月(1900) 手洗石 丸不二講 立石傳左エ門
- 明治33年6月(1900) 行名(「真行真面」)免状 割菱講 立石鉄之助
- 昭和3年3月(1928) 登山記念碑 割菱講 立石徳兵エ・立石鉄之助他38名